岩淵水門と荒川放水路

児玉 寛嗣

隅田川公園の遊歩道を散策しながら考えた。隅田川はどんなに大雨が降っても川岸の遊歩道まで水が入ってくることはめったにない。それは上流の水門のお陰である。

隅田川という呼び名、昔は松尾芭蕉が奥の細道の旅にでたと起点とされる千住大橋から下流をさしていた。しかし、今は赤羽に位置する荒川からの分流点を隅田川の起点としており、途中で石神井川や神田川などいくつかの川が合流して下流へ向かう。上流の水嵩が増した時には起点にあたる水門が閉じられて下流の増水を防ぐようになっている。

水門を作るきっかけとなったのは 1910 年 8 月の大洪水である。当時、赤羽から下流の荒川はなく上流からの流れはすべて隅田川に注いでいた。そのため、川は氾濫して下町は冠水し、約 150 万人が罹災した。被害を重大視した内務省は災害対策の一大プロジェクトを立ち上げた。それは川を分岐させて隅田川に流れ込む水量を水門で調節して、残りはすべて新たに作る放水路で海まで流下させるというもので、放水路は全長 22 キロ、幅 500 メートルという壮大な計画であった。水路はなるべく人家のない所を通るように計画が立てられたが、それでも千数百戸の家が水没した。

約 20 年の歳月をかけて放水路は 1930 年に完成して荒川放水路と呼ばれるようになった。1965 年からは荒川に名前が変わった。水門は岩淵水門と名付けられて 1923 年に完成。放水路ならびに水門の工事ではパナマ運河建設に従事した技師・青山士（あきら）の貢献が大きかった。

老朽化のため 1982 年に建て替えられて役目を終えた後も「旧岩淵水門」として残っている。治水の歩みを物語る建造物として「旧岩淵水門と荒川放水路」は経産省から近代化産業遺産の指定を受けている。旧岩淵水門は朱塗りで赤水門と言われ、300 メートル下流の二代目の岩淵水門、青く塗装されたひとまわり大きい青水門とのコントラストも一興である。気象変動の影響による洪水が各地で問題となっているが、先人の功績は多としなければならない。